

手段節と目的節

川 島 祝

0. 本稿は、手段を意味する節と、目的を意味する節とが、同一文中に現れるような文の分析を試みたものである。記述のわく組みとしては、Fillmore (1966, 1968) の格文法を用いた。但し、分析の途中で、格文法モデルの若干の修正が、どうしても必要になったので、はからずも、その修正案と、その修正案の妥当性を論ずる形になった。

修正の要点は、次の*をつけた事項である。

$S \rightarrow M + P$

$P \rightarrow V + A + I + O \dots\dots\dots$

$A \rightarrow \text{by} + NP^{(1)}$

$O \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} NP \\ S \end{array} \right\}$

* $I \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} NP \\ S \end{array} \right\}$

また、この結果、動詞の frame feature にも修正が加わる。

demonstrate, show, mean, etc.

$\left[\text{_____} (A)(I)O \right]$

* open, kill, break, etc.

$\left[\text{_____} \left\{ \begin{array}{l} A \\ I \end{array} \right\} O \right]$

* by, (in order) to

$\left[\text{_____} \left[\begin{array}{l} S \\ I \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} S \\ O \end{array} \right] \right]$

本稿では、変形適用後の語い挿入を、一部、認めており、従って、ここでいう深層構造は、標準理論における深層構造の定義に抵触する。しかし、Fillmore の用いて

いる深層構造と非常に近い意味で、そのまま、この用語を用いることにする。

- I. (1) (i) He earns his living *by singing*.
 (ii) *He sings* (in order) to earn his living.
 (2) (i) He appreciated it *by reading it aloud*.
 (ii) *He read it aloud* (in order) to appreciate it.
 (3) (i) He was promoted *by working hard*.
 (ii) *He worked hard* (in order) to be promoted.

(1)–(3)における、それぞれ (i) と (ii) の対応関係は、次のとうりである。まず、統語上からいえば、(i) の主節は、(ii) においては、不定詞節であり、不定詞節の主語は、主節の主語と一致するので、削除されている。また (ii) の主節は、(i) においては、by+動名詞であり、同じく動名詞の主詞は削除されている。次に、意味上からいえば、(i) においては、by+動名詞は、主節にあらわされている目的を達成するための、手段、方法をあらわしており、同じ意味をあらわす部分は、(ii) においては、主節となっている。また、(ii) の不定詞節は、主節の達成すべき目的をあらわしており、この部分は、(i) においては、主節となっている。従って、(1)–(3)における、(i) と (ii) の表面上の相異は、目的（あるいは手段）をあらわす部分が、主題 (Topic) となっているか、評言 (Comment) になっているか、という点にある。((i)–(ii) の意味上の相異については、注2) (ii) の不定詞であらわされている、目的を意味する部分は、一見、for-to を complementizer とする補文と似ているけれども、in order to + VP にパラフレーズできない点で異なっている。また、(ii) の、by+動名詞であらわされている、手段を意味する部分は、because+S と意味的に似ているけれども、because 節は、主節との選択上の制限がほとんどなく、また、その意味の中心が、手段、方法ではなく、「理由」にあるように思われるので、by+動名詞とは区別することにする。

そこで、これ以後、(i) の主節と (ii) の不定詞節のように、主語の、意識的 (volitional) な目的を意味する節を「目的節」と呼び、また、(i) のby+動名詞と、(ii) の主節のように、そのような目的を達成するために、同じく主語が意識的にとる行動をあらわす節を「手段節」と呼ぶことにする。

2. 1(1)–(3)の、おのおのの対における、明らかに対応関係を有すると思われる文の深層構造は、そのような対応関係が明示されるものであることが望ましい。ここで Fillmore のモデルを採用する理由は、次のとおりである。目的節と手段節の関係が、(i)と(ii)にあらわされているような、表面上の相異にもかかわらず、深層では非常に似たものであり、このような関係は、たとえば、

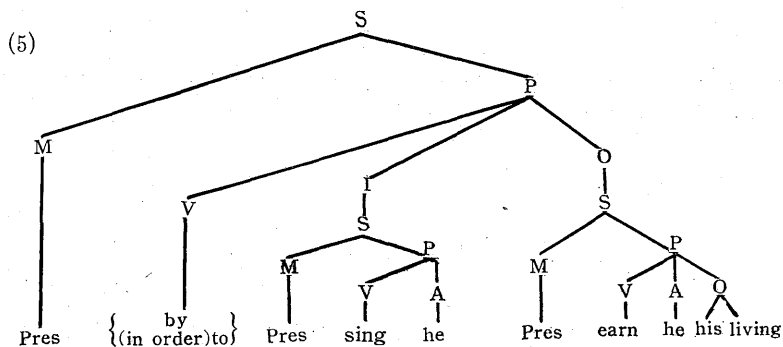
(4) (i) I like your outfit

(ii) Your outfit pleases me.

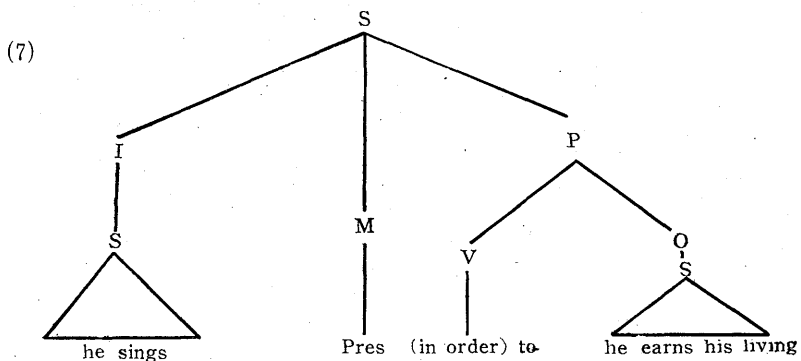
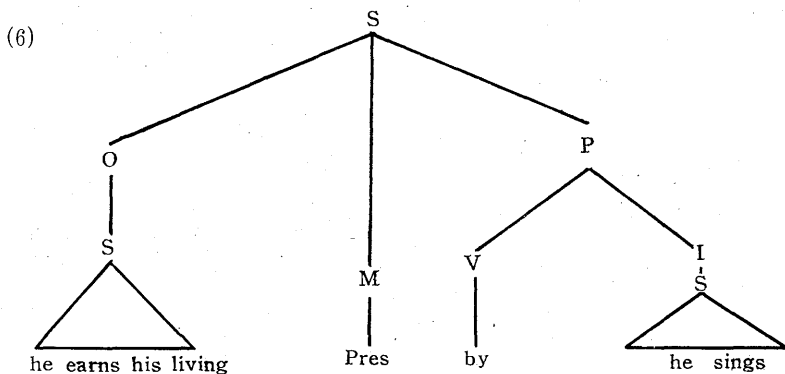
における *like* と *please* の関係とパラレルに扱えると思う。*like* も *please* も frame feature [_____ O+D] を有し、意味的特徴も共有しているが、ただ主語としてDを選ぶか、Oを選ぶか、という点で異なる。同じように、(1)–(3)における *by* と (in order) *to* とは、主題になるのが目的節であるか、手段節であるか、という点では異なってはいても、その frame feature も、意味的特徴をも共有している、と考えることは可能と思われる。⁽⁴⁾

しかしながら、Fillmore のモデルをそのまま用いたのでは、目的節、手段節を同一文中に含む(1)–(3)のような文を扱うことは、不可能のように思われる。というのは、Fillmore は、副詞節（つまり、Sを含む副詞的要素）の取り扱いについてはまったく触れていないだけでなく、副詞節の取り扱いを考慮に入れないまま、種々の制限を述べてあるので、目的節、手段節のような副詞節をこのモデルに従って記述しようとする、手がかりはないにもかかわらず、制限にはひっかかる、ということになる。本稿で提案する修正案は、(1)の深層構造を(5)のように表示することによって示すことができる。

(5)において、*by*と (in order) *to* は、[_____ I+O] という frame feature を有する動詞である⁽⁵⁾。Iは、NPのほか、Sにも書きかえられ、この点、 $O \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} NP \\ S \end{array} \right\}$ におけるOとよく似たカテゴリーとなる。(with+NPであらわされるIとの関係については§3.1) 動詞 *by* と動詞 (in order) *to* の相異は、*by* の方が主語としてIを選び、目的語として、SであるOを選び、その complementizer として動名詞形を要求するのに対し、(in order) *to* の方は、主語としてIを選び、動詞に続く目的語として、SであるOを選び、その complementizer として、不定詞形を要求する点である。



He earns his living by singing を例にとると、(5)において、埋め込み文の内部での主語選択と、by による主文の主語選択とによって、(6)が得られる。(in order) toについても、主語選択に関する相異を除けば同じ方法で(7)が得られる。



(6)(7)の P 内に残っている S の主語を、主文の主語となっている S の主語によって削除し、さらに、主動詞 (by, (in order) to) の要求に従って、埋め込み文の complementizer を決定すると、(1) (i), (ii) が得られる。

また、(6)(7)から、外置により、次のような文を得ることができる。

(8) (i) It is by singing that he earns his living.

(ii) It is to earn his living that he sings.

これらの文を得るには、次のような過程を経ることになる。(6)(7)で主語となっている S を外置(あるいはコピー)により、主文の右端に移し、主語の S の位置に、(つまり、(6)(7)の、それぞれ O, I の下に) it を残す。そして、M に支配された Pres の右に、形容詞の場合のように、機能語 be を導入する。(従って、M は、Pres+be を支配することになる。)⁽⁶⁾

このような変形が可能である、という事実は、by, (in order) to の前に来る S が名詞的要素であり、従って、by, (in order) to を動詞と呼び、その前に来る S を主語、と呼んでもおかしくないことの 1 つの裏づけとなる。

これらの動詞の動詞らしさについて、さらに、次のようなことがいえる。英語では目的節と手段節を関係づけている、これら 2 つの動詞は、それ自体で、時制を形態的にあらわすことをしないけれども、(8)のように、主語が外置されると、意味を持たない語 (be) とむすびつくことにより、時制を示すことが可能である。また、日本語では、目的節と手段節とを関係づける要素は、「～することによる」「～するためである」のように、動詞、あるいは、動詞をつけることによって、時制をあらわすことができる要素である。このように、目的節と手段節とをむすぶ要素が、どのような時制のあらわし方をするかは、個々の言語の特殊性による、かなり表面的な問題であると思われる。

2. 2 Fillmore (1970) の述べている制限の中に、次のようなものがある。

(9) (i) 補文に書きかえられる格は O だけである。

(ii) 特定の格は、同一単文内では、1 回だけ生起する。

ところが、Langacker (1970) は、これら 2 つの制限が矛盾することを示す、次のような文をあげている。

(10) $\left[\begin{array}{l} S_0 \\ S_1 \end{array} \right]$ That this sentence is grammatical $\left[\begin{array}{l} S_1 \\ S_2 \end{array} \right]$ demonstrates $\left[\begin{array}{l} S_2 \\ S_1 \end{array} \right]$ that these

two claims cannot be true_{S₂} }_{S₀} (ラベルとかつこは川島)

この文では、(9) (i) に従って、S₁とS₂とがOだとすると、(9) (ii) に抵触することになるし、(9) (ii) に従って、S₁かS₂のどちらかをO以外の格に属する、と考えるなら、(9) (i) に抵触することになる。どちらにしても、(9)の(i)と(ii)が両立しないことになる。

このような矛盾を解消するには、もし2つの制限を両方とも否定あるいは修正してしまうのであれば、2つの方法しかない。(9) (i) を修正するか、(9) (ii) を修正するかである。どのみち、どちらかを修正しなければならないのなら、(9) (i) を修正して、Oだけではなく、IもSに書きかえられるようにした方がよいと思われる。その理由は2つある。

まず第一に、(9) (i) をそのままにしておいて、(9) (ii) の修正を、たとえ最少限度におきえて、SであるOだけは、同一文中で2回以上の生起が許される、ということにしても、非常に ad hoc な例外を許すことになってしまう。そうした場合、主語選択に関する規定により、主語にはOしか選ばれないことになるが、2つのOがどちらも能動文の主語になる、ということは、ありえない。どのみち、2つのOを区別しなくてはならないことになる。要するに、(9) (ii) を修正して、このようなことを認めると、格文法の説明力が大きくそこなわれることになってしまう。⁽⁶⁾

第二に、(9) (i) を修正して、IもSをとることができるようにすれば、(10)および同類の文、つまり、主語にも目的語にもSをとるような他動詞を含む文を、一般的に説明することができる。そして、このことは同時に手段節をIとすることの1つの裏づけとなる。(10)の見込みのありそうな深層構造は、次のようなものである。

(1) $\left[\begin{array}{c} \text{pres} \\ \text{M} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} \text{demonstrate} \\ \text{P} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{this sentence is grammatical} \\ \text{I} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{these two} \\ \text{claims cannot be true} \\ \text{O} \end{array} \right] \\ \text{V} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{I} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{P} \end{array} \right]$

これは、次の、(12) (i) の深層構造である (12) (ii) と、ほぼ同じである。

(12) (i) This demonstrates his integrity.

(ii) $\left[\begin{array}{c} \text{pres} \\ \text{M} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \left[\begin{array}{c} \text{demonstrate} \\ \text{P} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{this} \\ \text{I} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{his integrity} \\ \text{O} \end{array} \right] \\ \text{V} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{I} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{P} \end{array} \right]$

(11)と(12) (ii) は、どちらも VIOの構造を有し、Iが主語に選ばれる。また、意味上から考えてみても、両者のI、Oの意味的役割が異なるとは思えない。

このように、他動詞表現で、その主語にも目的語にもSをとるような文では、その主文の Proposition は、VIOのタイプのものではないか、と思われる。この種

の動詞として思いつくものにも、demonstrate の他にも、show, mean などがある。⁽⁷⁾

資料的にもっとよく調べてみないとわからないけれども、少くとも今あげたような動詞はSを、おのおの主語、目的語としない場合、〔_____A + I + O〕のような case frame を選ぶことのできる動詞である。

ところが、これらの動詞は、同じ〔_____A + I + O〕の動詞でも、kill, hit, open 等とは異なる点がある。kill, hit, open などの frame をなすOは、決してSではないと思われる。そこで、〔_____A + I + O〕のタイプの動詞を、次の2種類に区別することにする。

(i) 具体名詞をOとするもの — kill, hit, open, etc.

(ii) 抽象名詞(Sを含む)をOとするもの — demonstrate, show, mean, etc.

このうち、目的節と手段節とを関係づける動詞、つまり、by, (in order) to と同じ位置に生ずる動詞は、(ii)の類の動詞であって、(i)の類の動詞ではない。

次の節では、(i)の類の動詞を含む文について述べる。

3.1 この節では、今まで述べてきた目的節、手段節の分析を用いて、Fillmore の取り扱った文を、異なった角度から分析する試みを提出する。

(i) John opened the door with the key

(ii) John used the key to open the door

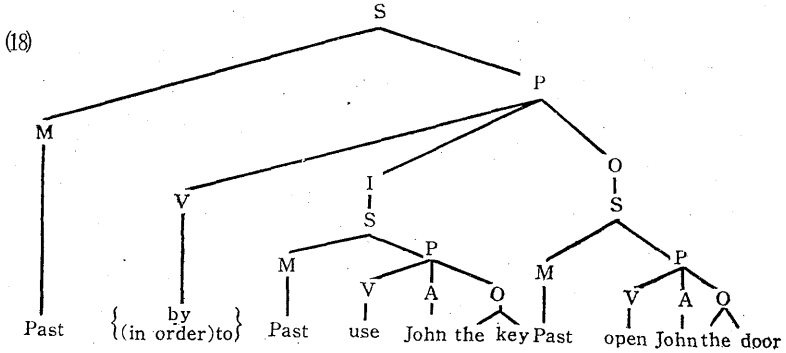
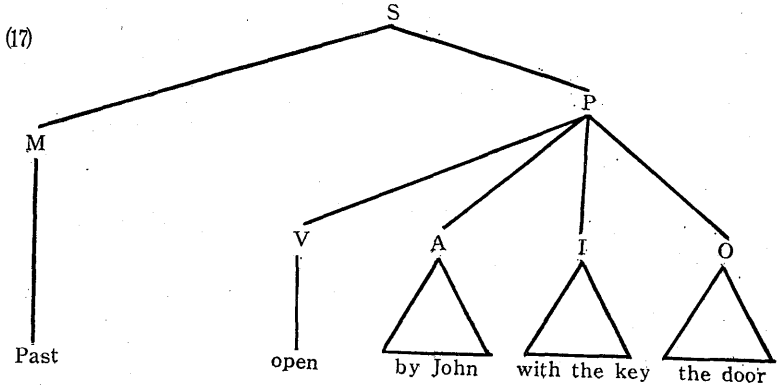
(iii) John opened the door by using the key

これらの文のうち、(i)と(ii)はFillmore (1968) にあらわれているけれども、(i)の構造についてのみ述べられており、(ii)の構造については、ただ、the key がIである、という以外には述べられていない。

Fillmore のモデルによれば、(i)の深層構造は、概略、(7)のようなものである。

本稿では、(i) — (iii)の深層構造として、(7)のかわりに、(8)を提案する。

(7)と(8)の相異は次のとおりである。(8)では、IがSを支配しており、表層のwith + NP は、by using + NP の段階を経由することによって得られる。the key は、Iではなくて、Oである。また、open だけでなく、前節(i)の類の動詞 (break, hit, kill, etc) を含む文全体についていえることだが、I以外のカテゴリー、つまりVAO



(17)では John opened the door の proposition に含まれる名詞的カテゴリーは、(18)では埋め込み文に現われ、主文には現われない。

深層構造(18)から、by, (in order) to を含む文(10) (ii) (iii)を得る方法は、§ 2. 1 で述べたものと同じである。また、(18)から with+NP を含む文(10) (i)を得るには、同じく前述の方法により、by using NP を含む文を導き、by using を with によって代入する。この場合、表面で、I が with+NP であらわされるための条件は、深層において I に支配された S の動詞が use である場合に限られる。つまり、(1)–(3)のように、by singing, by reading it aloud, by working hard のように、by +動名詞が、そのまま表面に現われるものは、深層において、I の中に use 以外の動詞を含んでいるということになる。これは経験的に正しい（つまり直観と合致する）と思われる。

§2.2 (15)において、Fillmore のモデルでは、〔_____A + I + O〕の frame をとることになる動詞を本稿では、2種類に区別した。このうち、(i)の open 類の動詞を含む文が、表層で with + NP である I をとる時、その I は深層構造では use を含む S である、と考え、また、(ii)の demonstrate 類の動詞が、表層で、S である I をとる場合、その I は、深層の I がそのまま表層にあらわれたもの、と考えてきた。そして、どちらの類の動詞を含む文においても、I に含まれない格カテゴリーからなる S に、O のラベルを与えた。この当然の結果として、本稿のモデルでは、

(19) I が S を支配する文においては、O も S を支配する。

ということになる。

3.2 これまで述べてきた分析から、open 類の frame feature にも若干の変更が加わることになる。(demonstrate 類の動詞については、Fillmore モデルと同じ。) (19)の枝分れ図からわかるように、I は open の frame feature には入ってこず、従って、open は、この場合

(20) 〔_____A + O〕

の frame を選んだことになる。同じようなことは、(15) (i) の類の動詞すべてについて言える。そして、このことは、A と I の共通性について、1つのヒントを与えてくれる。

Langendoen (1970) では、John opened the door のような、A を含む文は、表面に I が現われていない場合にも、深層構造では、すべて I を含んでおり、それが変形によって削除されたものである、(但し、この逆、つまり、「I が含まれているなら A も含まれている」とは言えない) と、述べている。そして、このことが正しいならば、frame feature 〔_____A + I + …〕に現われる I は余剰的である。ところが、本稿の分析(19)では、必然的に、I は open の frame feature から除外される。

さらに、次の文

(21) (i) *The wind opened the door.*

(ii) *The door was opened by the wind*

のように、A を含んでいると考えられず、また、*by using the wind* のような基底形があるとも考えられない場合、この open は、

(2) [_____ I + O]

を選んだと考えざるをえない。(これは Fillmore と同じ)。従って、open の frame feature には、(2)と(2)の2種類があることになる。これを一般的な略記法によって示すと、

(2) [_____ { I }
 { A } + O]

となる。

この frame は、with+NP を除いた単文、あるいは、with+NP を含まない単文では、I と A の選択が disjunctive である、つまり I か A か、どちらか一方しか生起しない、ということを示している。これは経験的に正しいと思われる。そして、同時に、A を含まぬ文で、しかも無生物主語を含む表現における I の、A との類似性をも説明しているように思われる。

ついでながら、Langendoen (1970) における、the role of cause は、すべて「(2)の [_____ I + O] における I」と言いかえることができるので、cause のようなカテゴリーの新設は不必要と思われる。もっとも、便宜的な呼び名として用いるのであれば便利ではあるが。(1970.10.7)

注

1 このAの書きかえについてであるが、むしろ、A→NPの方が良いかもしれない。つまり、Aは必ず一度は主語になる、ということにしておいた方が良いかもしれない。Fillmore が A を by+NP と書きかえる理由は、論理的主語、論理的目的語のあらわれるレベルを経由しないで、受身文を導き出そうとするからである。従ってもし、受身文を、subjectivization によって、直接深層から派生する方法をとらないのなら、A→by+NP の by は不必要と思われる。格文法の受身文の取り扱いに対する批判については、Langacker (1970) 参照。以下、本文中では、便宜上、by を略するが、この問題は、本稿の論点とは直接関係はしていないので、ここでは一応修正しないで、そのままにしておく。

2. (1)–(3)の (i) と (ii) の間に意味上の相異があるのは明らかである。一番大きな相異は、(1)では、目的節の内容は真であることが前提とされており、後に続く手段節の内容は、目的節の内容についての、話者の判断をあらわしている。従って、(1)では、目的節が presupposition、手段節が assertion であり、(ii) では、それが逆

になっている。たとえば、(3) (i) では、かれが昇進したのは確かだけれども、よく働いたから昇進したのだ、という主張は、話者の判断によるものである。また、(3) (ii) においては、かれがよく働いているのは確かだけれども、昇進しようとしてよく働いているのかどうか、また、実際に昇進するかどうか、本当はよくわからない。変形によって、このような意味の変化がおこることは認めざるをえないが、このような意味の変化にもかかわらず、手段節、目的節の意味上の役割は変わっていない。格文法でおこる、同じような問題については、Fillmore (1968) P48参照。

3 by, (in order) to は、[+V, -Adj, -Vb] のような素性を有することになる。(in order) to と形容詞との関係については、Lees (1963) P76. ff. 参照。これらの語を動詞として認めるか認めないかは、同一のカテゴリーに属しうる要素の資格をどう考えるか、という基本的な基準にかかっている。ここでは、深層においてある要素に対して同じような結びつき方をする要素には、同じラベルを与える、という立場を採用する。§2.2 において述べるように、これらの語は、demonstrate, show と同じく、I と O とを補文として選ぶ。このように、選択素性の方を、変形の適用可能性を示す規則素性よりも重視する立場については、Mc Cawley (1970) 参照。

4 (6)(7)の動名詞、不定詞の主語を削除する方法をはっきりさせることが、実は、できない。これは本稿の大きな弱点である。ここで必要なのは、「[X S₁ Y S₂ Z]_{SO} のような構造において、S₁の主語がS₂の主語と同一の場合、S₂の主語が削除される」というような変形である。本稿では、一応、このような変形を適用することにして話を進める。このような変形は、接続詞縮少変形と共通点を有し、また、これと同一ではないが同類の削除変形は、たとえば、分詞構文の主語の削除の場合にも必要だと思われる。

5. ここでは、概略、(1) (i) (ii) から(8) (i) (ii) を導く方法をとっているがこのような方法の外に、(i) That he earns his living is by singing. (ii) That he sings is (in order) to earn his living から、(1) (i) (ii) と(8) (i) (ii) を導く方法も可能ではある。どちらの方法がよいかはよくわからない。

6. Langendoen (1970) では、Patient という役割 (つまり格) が、同一文中に2回以上生起することが許されている。たとえば、(i) The train collided by

the bus において、斜字体の名詞句はいずれも Patient である。しかしながら、この文は、(ii) *The train and the bus collided* とパラフレーズできる。特定格の2回以上の生起の許されるのは、(もし許されるとしても)このような場合だけに制限されるべきである。(10)は、明らかに、ここに述べたようなパラフレーズができない。

7. *require* もよく似た分析が可能である。(i) *To climb steep hills requires going slowly at first* における2つの埋め込み文も、やはり、I, O であると考えることができる。たとえば (ii) $\left[\begin{array}{c} \text{Pres} \\ \text{M} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{require} \\ \text{P} \\ \text{V} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \text{someone going slowly} \\ \text{I} \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \text{someone climbs steep hills} \\ \text{O} \end{array} \right]$ のように。但し、*require* が、*demonstrate* 等と同じく $\left[\text{_____ A + I + O} \right]$ の frame に現れるかどうか明らかでない。むしろ、*by, (in order) to* と同じく、 $\left[\text{_____ I + O} \right]$ とした方が良いように思われる。というのは、この例では、主語として、SであるOが選ばれており、その点、*require* は *by* に似ている。また、意味上からも、(i)には、次のような意味が含まれているように思われる。(iii) *Someone goes slowly at first (in order) to climb steep hills.* (iv) *Some one climbs steep hills by going slowly at first.* このようなことは、次のような代案を示唆しているかもしれない。*by, (in order) to* は深層構造では現われず、従って、§2.1の(5)における主動詞は \emptyset を支配しており、つまり(5)は *verbless sentence* である、と考えた方が良いかもしれない。(この方法は、Fillmoreの *have* の取り扱い方と同じである。) もっとも、もっとデーターを検討してみないと、どちらが良いかは速断できないが。

8. このような *with* の成生を認めることは、変形適用後の語い挿入(あるいは音形付与)を認める、Gruber (1965), Bach (1968) の仮説を採用することになる。従って、厳密には、*by using* は、語ではなく、*with* という、もう一つの形態を有する、素性である。

参 考 書

- Back, Emmon. 1968 "Nouns and noun phrases" *Universals in linguistic theory*, pp.1—88, ed. by E. Bach and R. Harms; Holt.
- Chomsky, Noam. 1970. "Deep structure, surface structure, and semantic interpretation" *Studies in general and oriental linguistics: presented to Shirro Hattori*, pp. 52—91, ed. by R. Jakobson and S. Kawamoto: TEC
- Fillmore, Charles J. 1968 "The case for case" *Universals in linguistic theory* pp.1—88
- 1966 "Toward a modern theory of case" *Modern studies in English*, pp.361—375, ed. by D. A. Reibel and S. A. Schane: Prentice—Hall
- Gruber, Jeffrey. 1965. "Studies in lexical relations" Unpublished dissertation: MIT
- Langacker, Ronald W. 1970. "A review of Mark G. Goldin's *Spanish case and function*" *Language* 46. pp.167—185
- Langendoen, Terence D. 1970. *Essentials of English grammar*: Holt
- Lees, Robert B. *The grammar of English nominalizations*; Indiana University
- McCawley, James D. 1970. "On the deep structure of negative clauses" 『英語教育』9月号, pp.72—75.
- 小川洋通, 1970. 「無生物主語とは何か」 『英語学』第3号, pp.93—105
- Rutherford, William E. 1970. "Some observations concerning subordinate clauses in English" *Language* 46. pp.97—115